柔道における伝統の創造 - 西郷四郎の神話分析 -

The Invention of Tradition in Judo -The Saigo Shiro' Myth of Analysis-

溝口　紀子
文化政策学部国際文化学科

Noriko MIZOGUCHI
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

「姿三四郎」というヒーローは、講道館柔道、日本柔道の発展とともにあたかも実在の人物であるかのように語られている。日本のヒーローとして「姿三四郎」は 1942 年に小説化、1943 年 3 月 25 日に映画として上映された。
「姿三四郎」のモデルは西郷四郎である。西郷四郎の神話は講道館正史を確立するためには欠かせないであろう。
西郷四郎をとりあげ、実像に迫りつつその神話が生まれた当時の社会を活写することを試みたい。

The hero of the fiction "Sanshiro Sugata" is talked about with KODOKAN, development of the Judo in Japan as if it is an actual person. Sanhiro's character was based on Shiro Saigo.
Shiro Saigo became a hero in Japan and was the model for the main character in Tomita Tsuneo's novel " Sugata Sanshiro". And then, this film was released in Japan on 25 March 1943 by Toho film studios.
I think that the myth of Shiro Saigo is indispensable to establish KODOKAN for history of judo.
I describe that the society by a real image of Shiro Saigo and the reason the myth of Shiro Saigo was created.

はじめに

時代の柔道強者の愛称として「○○の三四郎」と呼称する場合がある。昭和の三四郎（岡野功）、平成の三四郎（古賀利彦）、女三四郎（山口香）などがその例である。

これは富田常雄の小説『姿三四郎』[1] が由来している。その「姿三四郎」のモデルは西郷四郎といわれているが、「姿三四郎はけっして西郷四郎ではなく、空想の人である」[2] と作者の富田は明記している。

なぜなら西郷は、講道館に在籍していたのはわずか八年であった。

にもかかわらず西郷の全生涯を、講道館の一柔道家の神話として語られるのはなぜだろうか。

「姿三四郎＝西郷四郎ではない」と、誰よりもはやく指摘したのは牧野登である。牧野は昭和七年、樺太で生まれ西郷頼母研究会の創立メンバーであり、昭和五十八年（1983）に『史伝　西郷四郎－姿三四郎の実像』を出版した。そのなかで文芸作品としての『姿三四郎』は、著しい虚実の混沌であり、結果として実像の西郷四郎を恣意的な虚への要請に応えるように断片的事実の素材供給源の立場に貶めていると指摘する。

三十二年間の西郷の後半生の一切が、あたかも「姿三四郎」の後日談のごとく、しかも残余の形骸のようにしかあつかわれていないことは虚像による実像浸食の著しい例であり西郷四郎の登場は虚像をより偶像化してやまない大衆の根強い潜在願望と、この願望に伴奏し、推進した当時の社会背景との作用が合流した趨勢がもたらしたものではないだろうか［牧野 ,1983:11］。

言い換えれば柔道が誕生した時代の趨勢が西郷の神話を作り出してきたともいえる。

講道館館長の嘉納治五郎が欧州旅行で不在中の明治 23 年に、西郷は「支那渡航意見書」を提出し講道館を去った。その後、宮崎滔天、鈴木天眼、頭山満らとともに大アジア主義に身を投じている。

とりわけ、辛亥革命で敗北した西郷四郎は日本に帰国し、明治 35 年 (1902) 長崎で創刊した「東洋日の出新聞」の編集長となる一方で、「日本泳法」の指導家として活躍した。西郷は、志田四郎―保科四郎―西郷四郎と再三改名し、さらに会津―新潟県津川―東京―仙台―久留米―長崎―尾道、朝鮮―台湾―中国と活動の場所を変えており、個人的、時代的理由によって複雑な歩みをしている。特に、講道館出奔を境に、五十七年の生涯がほぼ中央で真っ二つに両断され、互いの相貌が際立って異なって見える特異さがある［牧野 ,1983:11］。

加えて講道館の出奔により彼の人生が一転しているようにもみえるが、そのことによって講道館柔道の誕生と重ね合わせ、講道館神話を創りだし西郷四郎の実像を曖昧なものにしているともいえる。

だからこそ「西郷四郎」というヒーローは、講道館柔道、日本柔道の発展とともにあたかも実在の人物であるかのように語られているのではないだろうか？

西郷四郎をとりあげ、実像に迫りつつその神話が生まれた当時の社会を活写することを試みたい。

1. 柔道家としての西郷四郎

西郷四郎は慶應二年（1866）二月四日に会津若松で父志田貞二郎、母さたの三男として生まれた。当時の戸籍では志田四郎であった。志田家は越後津川地方の豪族の流れをくむ、会津松平地家に仕える御用場役百五十石の中級武士であった。四郎が三男でありながら「四郎」と名付けられたのは、姉を含めて 4 人兄弟の 4 番目の子であったからだという。

西郷が誕生した当時は幕末、未曾有の混乱期にあった。

アメリカ海軍のマシュー・ペリーが来航し開国を要求した。これを契機に幕府は鎖国から開国に方針転換するが、孝明天皇は開国に反対。異国排斥を唱える尊王攘夷論が高まっていた。朝廷のあった京都の治安は悪化し、幕府重心の間で新たに京都守護職の設置が検討された。その時に白羽の矢が立ったのが会津藩であった。

慶応三年（1867）十月十四日、江戸幕府第 15 代将軍、徳川慶喜は日本の統治権を明治天皇に奏上、翌十五日に勅許され、いわゆる大政奉還がおこなわれた。

そのときに、徳川幕府の首謀者として京都守護職就任を要請された会津藩主である松平容保は、後に西郷四郎の養父となる西郷頼母を家老職復帰させた。

明治元年（1868）、松平容保、西郷頼母らの旧幕府勢力と薩摩藩・長州藩らを中核とした新政府軍との内戦、戊辰戦争が始まった。西郷の父、志田貞二郎は主力戦隊の朱雀隊二番寄合隊に編入され参戦した。その後は長岡、越後方面に転戦するが 9 月 22 日会津藩が新政府に降伏し、会津戦争が終結した。

会津藩であった西郷たち志田家は故国壊滅の後、新天地を求め越後国蒲原郡赤塚村（現在の新潟県新潟市西区赤塚）を経て、同郡の角嶋村（現在の新潟県東蒲原郡阿賀町津川）に移住した。当時の旧会津藩士とその家族の多くが明治維新とともに士族帰農の生活にはいった。志田一家も多分に漏れず、剣を捨て鍬を手にし、西郷の祖父であるとされる佐五郎は、「耕作」に名前を改めた［牧野 ,1983:40-47］。

このように、西郷の幼少期の記述や資料は極めてすくない。

明治五年 (1872) 九月二十三日、四郎が七歳の時に父佐田次郎が三十八歳の若さで亡くなった。その後は母のさた、祖父の耕作が父の替わりとなって療育したという。

明治十四年 (1881)、十六歳になった西郷は三川村小花地の肝煎長谷川澄の家に住み込んだ。なぜなら当時、旧会津藩士の人たちが北海道に移民するものが多く、これを嫌がった西郷は長谷川家に住み込んだと言われている。

それではいつ、どこで、だれに西郷は柔術を習得したのであろうか。

講道館に入門してすぐに講道館を背負う強者の柔道家となるのはあまりに短期間で不自然すぎるといえる。講道館入門以前に他の道場に入門していたという記述はない。新潟や福島における講道館入門以前の西郷の柔術については現在も明らかにされていなかった。

一方で大東流合気柔術の継承者でかつ養父となった保科近悳（明治維新前は西郷頼母）の影響ではないかという説もある。これはさらに進んで西郷は西郷頼母の実子ではないかという説もある［牧野 ,1983:32］。

2. 上京と講道館入門

嘉納が講道館柔道を創設する明治十五年（1882）、3 月、十七歳の西郷は、親友の佐藤与四郎が進学のために上京することになり、それに同行した［牧野 ,1983:42］。その後、その年の八月二十日に四郎は講道館に入門している。講道館の創設がその年の五月であるから、四郎の講道館入門は運命的である。新興勢力の講道館にとっても強者が必要であったし、陸軍士官学校に入学を希望していた西郷にとっても、稽古ができるうえ住み込み書生として身元を保証してくれる講道館の存在はありがたかったに違いない。

講道館入門以前には、天真真楊流井上敬太郎の道場に西郷は通っていた。戦前の井上道場には嘉納の名札のほかに、後の講道館四天王のうちのひとり横山作次郎、戸張滝三郎、もちろん西郷四郎の名札も並んでいたという［牧野 ,1983:54］。天真真楊流（磯道場）は嘉納の師匠である福田八之助であるから、井上と嘉納は磯道場の兄弟弟子でもある。井上道場で卓越した才能をもつ西郷を講道館に抜擢したのは当然であるともいえる。

牧野が瞠目したのは講道館入門の際の誓文帳に、「他の八名がすべて印鑑を用いているのに対し四郎だけが血判で捺している点、そして生年月日の記載をはじめは「十五年」と記し、「十四年」に訂正していること［牧野 ,1983:64］」である。「十五年」を改め「十四年」と記載した年齢に関してはいずれも戸籍上異なる。慶應二年 2 月四日生まれの四郎は明治十五年八月の時点で、十六年六ヶ月でなければならないのに訂正した意味は不明である。また、誓文帳の血判に関しては、西郷以降の入門者はすべて血判が用いられている。西郷が印鑑を持ち合わせていなかったのか、それとも武士の気性なのか、よっぽどの決意をしめしたものなのか理由は不明であると述べている。

とはいえ四郎に続く入門者が血判になっていったのは「西郷四郎」というカリスマ性から「伝統」が創られたひとつの例なのかもしれない。

カリスマ性という意味では、西郷は富田常次郎と共に、講道館史上、初の有段者でもあり講道館の黎明期を支えた功労者でもある。ちなみに富田常次郎とは『姿三四郎』の作者富田常雄の父親である。

西郷はかねがね郷里の人たちに「大人になったらイクグン大将になる」夢を持っていた。「イクグン大将」とは津川弁の訛で、陸軍大将のことである［牧野 ,1983:46-47］。とはいえ、上京したものの四郎にとっては、陸軍士官学校にはいるためには超えなければならないハードルがあった。それは学力と身長、そして藩派閥であった。

当日の徴兵令の身体検査基準では五寸一尺（曲尺）以上と定められており、四郎の身長は五寸前後（約 151cm）であり当時でもかなり背が低かった［牧野 ,1983:50］。

学力では士官学校入学準備のため成城学校に入学したといわれるが、その証拠はない。そしてそれら以上に大きな壁であったとおもわれるのが藩閥の壁である。当時の明治政権では薩摩、長州の藩閥で固められており朝敵の汚名を被った旧会津藩士の出身というだけで士官になるには不利にあったに違いない。

3. 山嵐

「山嵐」とは、西郷四郎の得意技であるが、西郷や講道館が創出した技ではなく、古流柔術・真楊流・楊心流で「山落し」と称されていた従来の技に嘉納が新たに命名した。

たしかに山嵐は「背負い落し」を変形した投げ技であり、技としてはそれほど難易度が高い技ではない。背負い落し（背負い投げ、もしくは体落しの変形）をかけて、相手が踏ん張った際に足を払うと自然と山嵐に変化できる。それではなぜこの山嵐が、「西郷の前に山嵐なく、西郷の後に山嵐なし」と西郷の神話として語り継がれてきたのであろうか。

富田常次郎は四郎の山嵐について次のように述べている。

> *これだけの技ならば誰にでも出来さうであるが、実行はなかなか容易ではない。西郷がこの技を得意としたのは、彼の身體上の特徴が二つあった事に依る。その一つは彼の身體が矮小であったから（筆者注・西郷四郎の体格は、身長、約五尺一寸（約 153 センチ）、体重、十四貫（約 53 キロ）と伝えられている）、殊更に腰を下げなくても、押し返す相手をそのまゝ引込めば、彼の體は丁度理想的な支點となるからである。故に時間を省き、又、潰される憂ひがないのである。もうひとつの特徴は、彼の足ゆびが普通の人と違って、熊手の様に皆んな下を向いてゐた。だから払腰の様に足をのばして相手の足首にかけると、それが豫定の位置をはずれて、上の方に流れると云ふ様な事がない。*
>
> *即ち、相手の踝を目的とすれば、そこにぴたりと喰いついてゐるのであった。その上、彼は前にも言った様に大膽に思ひ切って、乾坤一擲に技をかけるのであるから、殆ど百発百中相手を投げ飛ばしたのである。要するにこの技は、小さい人が、より大きい人に試みる方が有利であると思ふ*[5)]

このように、体の小さい四郎だからこそ乾坤一擲に山嵐をかけると、ダイナミックに、自分より大きい相手を殆ど百発百中相手投げることができたということが伝説的に語られている。

とりわけ、講道館創設以来、厳重に他流試合を禁じてきた嘉納であったが、第五代三島通庸（みしまみちつね）に招待を受けた明治 19 年（1886）武術大会だけは、秘蔵の四郎を出場させた。四郎は得意の「山嵐」で、楊心流戸塚派の武術家昭島太郎を破った。

実際、山嵐を引っ提げ西郷は試合に臨むと乾坤一擲に相手を投げ、三島を主賓とする時の要人達の眼前に必殺技の山嵐を披露し講道館の強さを見せつけた。このことにより講道館柔道は警察官必修科目として、警視庁に採用された。

ここから講道館神話の記号として「西郷四郎」が語り継がれていくことになる。後年、富田常雄によって『姿三四郎』として小説化されることで一躍有名になる。「小よく大を制す」、大男を小兵が投げ飛ばす西郷（山嵐）は、意外性があり大衆を惹き付けた。日本人の普遍の民族的に心情にアピールし、さらには大陸に飛躍を目指す明治、大正期の国是とも合致し、高揚を続ける大きな趨勢を背景に時とともに広く深く、伝播し講道館の看板として宣伝されることとなる［牧野 1983:106］。

4. 講道館出奔と大アジア主義

西郷が 25 歳のとき、嘉納が欧州旅行で不在中の明治二十三年六月二一日に「支那渡航意見書」を提出し講道館を去った。

翌年の二十四年一月一六日に帰国した嘉納は講道館・青年舎監督の西郷を追放した。西郷が講道館を出奔するに至った深意はミステリーでもある。

翻って歴史研究者の丸山は「彼は身体こそ矮小であったが、その性格はかれの得意の山嵐に顕われたるごとく、乗るかそるかの的のことを敢えてやる、大胆でしかも率直なる武人的性格の持ち主であったが、嘉納先生の洋行中、わずか一年半足らずの間に凋落したのは、惜しむべきことであった。然らざれば、その頃年も若かったから、未だ何年かの名声を維持することはできたであろうに。以来十余年、私が彼と再会したときには、アルコール中毒で余程弱っていたようであった［丸山 1939,145］」と西郷の凋落ぶりを述べている。

一方、牧野は、「初期講道館の組織的脆弱さや、統率者嘉納の指導力の限界と見るか、あるいは単純に四郎の「我儘」と見るかによって評価の分かれるところではあるが、嘉納が見落としていたものは、大陸飛翔の夢の実現、といった遠心的な四郎のロマンティズムとそれを支える四郎の " 野生 " のみではなく、むしろ重要なのは急進的な四郎の武士道精神ではなかったか［牧野 ,1983:388］と、西郷が単なる「思いつき」ではなく時代の思想的な背景があり出奔したのではないと述べている。

西郷の出奔当時の日本は、板垣退助らの自由民権運動が高まり、征韓論が提唱されていた。1889 年（明治二二年）には大日本帝国憲法制定を迎え翌 1890 年（明治二三年）に第 1 回総選挙が行われ、帝国議会が開催された。

いわば明治維新の動きから取り残された会津人の西郷にとって、中国や朝鮮を理想郷として第二の維新へのきっかけを模索していたのではなかとも考えられる。その後、宮崎滔天、鈴木天眼、頭山満らとともに大アジア主義に身を投じることになった。とはいえ、講道館出奔後、すぐに大陸へは行かなかった。この間の行動は不明である。

5. 仙台・二高師範

明治二七年七月、西郷は仙台・二高の三代目柔道師範に就任している。前掲の牧野によると「未だ柔道史の語りぐさになっている一高対二高の対校試合が始まったのは明治三十一年頃であったが、学習院・慶應義塾・東京大学・海軍兵学校・一高・五高二続いて講道館柔道を取り入れていた名門・二高に短期間ながら四郎が師範として正式に就任している事実は、柔道界における当時の嘉納治五郎の影響と四郎が講道館を出奔した状況を考えると理解困難なことであるが、おそらく前任者湯浅松之助が時五郎に執り成した結果の就任であったに違いない［牧野 ,1983:188］と不可解な人事を述べている。

たしかに講道館を出奔した西郷が嘉納の息がかかる二高の師範になるのは考えにくい。むしろ、二高は嘉納の影響力をあまり受けていなかったからこそ、西郷は師範に就任できたのではないだろうか。第 2 章で述べたように二高は高専柔道であり、講道館柔道の影響はあまり受けず、独自のルールで発展してきた。実際、二高柔道部尚志会第三回大会席上でおこなわれた講演草稿（尚志会雑誌第六号）をみると、講道館や嘉納のことは一切触れず、嘉納の思想の影響は陰を潜め独自の武道精神を鼓吹している。

6. ソーレ事件と大陸活動

その後、明治二八年、久留米の南築武道館の柔道師範に就任している。この時西郷の国粋的なナショナリズムが招いたとされる「ソーレ事件」というフランス人牧師迫害事件を引き起こしている。ソーレ事件とは、下坂道場に通っていた明善校を中心とする生徒が、当時久留米に在住していた唯一の外国人牧師ミセル・ソーレの家に石を投げたり、板塀を壊したりするなどの集団的襲撃を起こしている。とりわけ西郷ら 4 名がソーレ邸に押し掛け「日本には日本古来の宗教があるのでキリスト教を普及しなくても結構だ。一日も早く布教をやめて帰国せよ。」と強談判し押問答のすえ警察沙汰になったという [6]。

ソーレ事件後、明治三三年まで西郷の所在が不明である。この間、台湾、中国へ渡り、当地では満州義軍に参加したとか、柔道の指導をしたのではないかとの説がある。いずれも大陸期の西郷の実情は全く不明である。今後の研究課題として武徳会満州支部などの史料を分析する必要がある。

西郷は帰国すると、明治三五年一月、西郷は鈴木天眼 [9] とともに東洋日の出新聞（とうようひのでしんぶん）を長崎で創刊した。西郷の辛亥革命の現地リポートは十月三〇日から十二月一九日までの五十日間、十六回にわたって誌面を飾った。詳細については『史伝西郷四郎』に収録されているのでここでは割愛する。とりわけ西郷は明治四四年の辛亥革命に際し、記者として中国に渡り、「武漢観戦通信」を東洋日の出新聞に連載して、革命軍を応援した。孫文は大正 2 年 (1913)、長崎の鈴木天眼宅を訪問している。

また長崎では、武徳会長崎支部に属し、「大東義塾」（もしくは泰東義塾）という道場を開設し柔道の指導していた [7]。その一方で明治 37 年、瓊浦遊泳協会（現・長崎遊泳協会）を創立し、理事に名を連ねた。また、大正 3 年と同 5 年には、有明海横断遠泳の監督・顧問として、その実現と成功に主導的役割を果たした [7]。のちに西郷の泳法は「日本泳法」となった [8] さらに長崎商業高校では弓道講師も兼任し体育界の指導者としても大活躍する。

この時期の西郷は、辛亥革命現地報道を終え大アジア主義を理想に掲げ、理想の実現をめざし充実した日々であったに違いない。講道館の出奔を後悔するような言動はない。

とはいえ西郷が 50 歳になる頃から持病の神経痛がひどくなっていった。その上、西郷の母親の訃報で落ち込んでいた。大正八年七月中旬、嘉納は西郷を慮り上京するように手記を送っている。実際面会が実現し、大正九年の春、西郷は療養のために尾道へ転居する。しかし尾道の生活は三年しか続かなかった。大正十二年十二月二三日、西郷四郎は永眠する。

7. 映画「姿三四郎」としての神話の再構築

平成 25 年（2013）は、NHK 大河ドラマ『八重の桜』で幕末の会津藩が注目され、また全柔連の不祥事問題が相次いだ年でもあった。この年に星亮一 [4] は『西郷四郎の生涯―伝説の天才柔道家』（平凡社）を上梓した。冒頭で星は、「会津にはもう一人、スターがいた。日本柔道界に不滅の光芒をはなった天才柔道家、西郷四郎である［星 ,2013:6］。伝説の巨人西郷四郎の生き様は、原発事故にあえぐフクシマの人々に生きる希望を与え、かつ不振の日本男子柔道に活をいれてくれることは間違いない。［星 ,2013:10］」と語られている。現在もなお、「西郷四郎」は柔道においてその威光は衰えないといってもいい。

とりわけ西郷四郎の神話 = 講道館の神話は、小説『姿三四郎』によって、士族階級の人々のアイデンティティの幻想を融合させた。

さらに「神話」は映画化された。映画版『姿三四郎』は富田常雄の小説『姿三四郎』を原作とする映画である。

1943 年（昭和 18 年）に情報局国民映画として公開されたが映画化は複数回行われている。この監督にあたったのが黒澤明である。そして『姿三四郎』は黒澤の初の監督作品でもある。とはいえ戦争色の強い、表現の自由が規制されていた時代であり、『姿三四郎』は情報局が監視する国策的な作品となった。

また昭和二十年五月、アメリカ空軍 B29 の空襲で日本は焦土となりつつあった時期にも関わらず続編の『續・姿三四郎』が公開された。

冒頭、横暴なアメリカ人水兵を三四郎が海に叩き込む。外国人の異種格闘技戦に勝つストーリは、当時、鬼畜米英の撃滅をスローガンに掲げていた時期でもあり国威高揚に最も効果的であった。

「外国の事物と日本の事物についてのこの見かたは、まさしく日本の軍情報局の目的に合致するものであり、とくに映画の終わりにサブ・タイトルの形で洗われる結論はベッタリそれである。いわく、機敏な日本柔道は、図体ばかり大きくて精神性に欠けるアメリカのボクシングには常に勝つのだ、と三四郎の行動はこれを示すためのものであり、その理由づけの方向は純粋に日本軍部の意向そのものである。異国の民は日本の武術の栄光だけでなく、日本の態度の基調は完全に慈愛にあることを知らしめられねばならなかった。日本は親切な兄であり、他者をこらしめなければならないと思ったときだけ武威をふるうのである」「前作の三四郎は自己を見いだそうとしている本物の人間で、右京が原のおそるべき運命の戦いを通じて彼はそれを発見する。しかし続編のほうの彼は、できあいの主人公で、何が何でも勝つ事に決まっている存在であり、従って戦いのほうも、何が何でも派手ならよろしいのだ。「続三四郎」は、どこをみても意味のないことだらけである」と外国人映画評論家ドナルド・リチーは「『續・姿三四郎』は酷評する。さらに「黒澤がありきたりの日本の商業映画にもっとも近づいた作品であり、それゆえに、商業映画との類似点および相違点は注目に値する。これは国策映画であって、個人の映画とはまったく正反対の作品である。これは娯楽映画であって、楽しめる映画とはぜんぜん違う作品である」[10] と述べ自由な表現を規制された国策映画であることを批判している。

すなわち『姿三四郎』、とりわけ『續・姿三四郎』は柔道がはじめてプロパガンダに利用された国策映画であった。

プロパガンダとして利用された理由は、「機敏な日本柔道は、図体ばかり大きくて精神性に欠けるアメリカのボクシングには常に勝つのだ、と三四郎の行動はこれを示すためのものであり、その理由づけの方向は純粋に日本軍部の意向そのものである。」とリチーは述べているが、それだけでなく姿三四郎のモデルとなった西郷自身がそれは武士

として死んでいく寓喩でもあったからではないだろうか。

西郷は会津出身の下級武士であり、警視庁での試合で柔道を誕生させながらも、アジア解放を標榜する辛亥革命に仮託して、「第二維新」の展望を拓こうと[11]夢をみるが、結局かなわなかった。とはいえ西郷は会津人としての意地を生涯貫いたともいえる。

だからこそ、明治大正期、国粋主義に傾倒していく日本では、西郷の愛国主義者の生き様は、小説『姿三四郎』となり士族階級の人々のアイデンティティの幻想を融合させプロパガンダとして利用されたのではないだろうか。

さらに昭和前期から戦中にかけて会津武士道が国是として賞揚賛美される時代の中で柔道という集団の夢が、映画『姿三四郎』となり、武士階級や士族の倫理であった会津士魂が顕彰され、西郷四郎神話を生み出した。

それは西郷が会津出身であり陸軍大将を志したこと、講道館と古流柔術との闘争、大アジア主義への傾倒、古武術の日本泳法の創立したことは、国家主義的な象徴だけでなく、士族階級の男性的な主体の価値を伝えている。さらに小説、映画化されることで、神話となり、大衆に共感されたのではないだろうか。

8. まとめ

講道館の神話のなかで生き続ける会津出身の西郷四郎は、警視庁での試合で柔道を誕生させながらも武士として死んでいく寓喩でもあった。それは柔術＝亡び行く武士、ととらえることができる。

明治大正期、国粋主義に傾倒していく日本では、西郷の愛国主義者の生き様は、小説『姿三四郎』となり士族階級の人々のアイデンティティの幻想を融合させた。さらに映画『姿三四郎』となり、武士階級や士族の倫理であった会津士魂が顕彰され、西郷四郎神話を生み出したのではないだろうか。四郎が会津出身、陸軍大使を志した、講道館と古流柔術との闘争、大アジア主義への傾倒、日本泳法の創立という事象は、ナショナルな象徴性だけでなく、男性的な主体の価値を伝えているともいえる。

明治になると、江戸時代の身分制度が廃止され四民平等の政策が採ら支配階層は皇族・華族・士族になった。大正、昭和期になると産業資本による大規模な組織化により、大衆消費社会のなかで士族階級の男性が平民に代わっていく過程は、西郷四郎の生き様と並列する。だからこそ西郷四郎神話は大衆消費社会に生きる群衆のなかで共感を得られたのではないだろうか。

これはベースボールの誕生ともよく似ている。内田は、『ベースボールの夢』のなかで、資本主義、都市の時代が始まる19世紀末から20世紀へ変貌を遂げていくアメリカのミドルクラスの姿とベースボールの神話について「アメリカのベースボールの起源を発見し、それに純粋にアメリカ的なものに仕立てる「神話的言説」の背景には、ミドルクラスの男性を取り巻く社会過程の変化が横たわっている。神話的言説は社会過程の変化については何も言わず、愛国主義の装いを凝らすのに腐心している。」「ナショナルな象徴性だけでなく、むしろ男性的な主体の価値やディシプリンを生々しく伝えるものであることを忘れてはならない［内田 2007:157］」とベースボールの神話の背景を分析する。

さらに「ベースボールの世界がそれ自身ひとつの神話的なコスモロジーをもっており、またある種の儀礼的秩序をもっていることから、ベースボールを近代の「宗教」として分析することの必要性を強調する人たちも少なくはない。ベースボールは決して宗教を代替するものではないとしつつも、ベースボールを世俗化した「準—宗教」(quasi-religions) と見なす人たちがいる［内田 2007:13］」。

内田が述べように柔道も神話的なコスモロジーを持っている。とりわけ「武徳」や「武道」という儀礼的秩序をもっていることから「準—宗教」と言われる事がある。

その一例が講道館にある「柔道の殿堂」である。西郷四郎をふくめ19人の柔道家が、柔道界の礎を築いた功績を称えている。偉大な柔道家は、講道館の殿堂に入り永遠に「不死」の存在となる。殿堂入りした柔道家は皆、軍、警察や教育界で活躍した時代の名士たちばかりである。とりわけ2人の軍神、広瀬武夫と湯浅竹次郎も含まれている。また講道館関係者だけでなく公職追放を受けた正力松太郎や栗原民雄など武徳会関係者も含まれている。言い換えれば、顕彰をうけた殿堂の柔道家たちは「武徳」としての功労者たちでもある。

さらに講道館の道場には嘉納の遺影が飾られ、とりわけ七階の大道場には嘉納の遺影だけでなく使用していた椅子が置かれている。講道館は日本における柔道の伝統や記憶を集積するだけでなく、むしろ神話的な信仰の総本山となっているのかもしれない。

それは士族階級の男性たちにとって明治、大正、昭和になっていく過程で産業資本による大規模な組織化、社会変化するなかで講道館柔道は一種の幻覚と陶酔となっていったのではないだろうか。

昭和初期に歴史家の丸山は武徳を次のように説明している。

> *「武士階級というものが徳川時代で滅んで明治になって武士階級が存在しないから、従って武士道精神もなくなってしまったと考えるかも知れぬが、さうではないのである。武士階級がなくなったとしても決して武士道精神は消滅したわけではないのである。そして明治になって発展してくるわが柔道の根底にもこの武士道精神がなければならぬ。この精神があってこそ世界の隅々まで及ぶことのできる日本の柔道であって、それは形ばかりではそうなり得ないものである。日本の伝統的な武士道精神と結びついた柔道こそ誠に日本的なものとして理解することができるのである［丸山,1939：90］」*

言い換えれば社会が大きく変化していくなかで士族階級の男性的な価値観をそのまま実現していくことは困難となっていったからこそ武士道精神と柔道を結びつける必要があったのではないだろうか。さらに戦後になると、戦前、日本柔道界の双翼だった武徳会が解散されたために、残された講道館だけにその想いを強く付託された。つまり武徳からスポーツに変容するときに、講道館神話は士族階級の男性が求めたナショナルな象徴性だけではなく、寓話ともいえる。

注

1) 小説、『姿三四郎』。主人公の姿三四郎は会津に生まれ、明治 15 年、17 歳で上京した。これは実在の柔道家で講道館四天王の一人、西郷四郎の来歴と全く同じであり、西郷がモデルだと言われる。
三四郎は学士の矢野正五郎（やはり講道館柔道の創設者、嘉納治五郎がモデル）の柔道場に入門し、天才児と言われた。他の柔術家やボクサー、空手（唐手）家などに勝利しつつ、人間として成長してゆく。得意技は山嵐。
2) 新潟県積川町麒麟山上に建つ「西郷四郎之碑」碑文から引用。「明治二十年の昔、講道館で山嵐をもって鳴らしたのは西郷四郎である。この技は空前にして絶後といふ。したがって山嵐の壮烈な技をもって小説に現はれた姿三四郎を西郷四郎を小説化したものと見なしたい郷里の人達の考へは無理からぬことと思ふ。空想狸の叙景をもって生を過ごす小説家として、姿三四郎が実在したといはれることの、これ以上の誉れはないが、姿三四郎はけっして西郷四郎ではなく、空想の人である。作者の空想狸に浮かんだ三四郎の生涯の一齣に西郷四郎の面影が浮かんだ事は事実である」
3) 牧野登　昭和七年（1932）樺太出身。『会津人が書けなかった会津戦争 ― 会津への手紙』歴史春秋出版 (1998)。歴史調査研究主宰。会津研究者
4) 星亮一。昭和十年 (1935) 宮城県仙台市生まれ。日本の歴史小説家。東北福祉大学講師、東北史学会会員、日本文芸家協会会員。戦時中、仙台市立上杉山通小学校から宮城県丸森町小斎小学校に疎開、仙台に戻ったが、父親の転勤で仙台市立愛宕中学校から岩手県一関市千厩中学校に転校、岩手県立一関第一高校に学び → 東北大学文学部国史学科 → 日本大学大学院総合社会情報研究科修士課程修了。新聞記者を志望し、先祖のルーツである福島県の新聞、福島民報社記者になる。会津若松に転勤し、福島中央テレビ報道制作局長を経て独立、歴史作家としての道を歩む。東北史学会会員、日本文芸家協会会員、現在は福島県郡山市在住。『奥羽越列藩同盟』（中央公論社）」で第 19 回福島民報出版文化賞を受賞。
5) 出典 : 講道館ウエブサイト　山嵐
http://www.bodkin.org/j_waza/yamaarashi_j.html
6) 明治 22 年、久留米にキリスト教の宣教師ミセル・ソーレ神父が赴任し、布教活動を始めたが、このころ久留米では、いまだ藩政時代の意識が色濃く、耶蘇教排斥の気風があった。特に布教活動の拠点となった櫛原町は藩政時代の中級武家が住んでいたところで外国人排斥、耶蘇教憎悪が烈しく、ソーレ神父の排斥運動が甚だしかった。
http://www.pauline.or.jp/visitingchurches/201208_kurume.php
7) http://www.nagasaki-daiei.com/miyagawamasakazu8.html
8) 鎧を着たまま泳いだりする古武道泳法で、1932（昭和 6）年以降は、日本水泳連盟が、「日本泳法」12 流派を公認している。
9) 天眼は、日清戦争・義和団の乱以後の日本の大陸進出が不十分であるという考え方を持っていた。対露強硬の論陣を張り、日露戦争勃発後は、地方新聞ながら西郷四郎らを特派員として派遣する。しかし、戦争が長期化すると、休戦に向けての外交交渉・講和を主張、ポーツマス条約締結を明確に支持する。全国の多くの新聞が講和反対を唱える中、新聞史上に異彩を放っていた
出典 : 長崎県立長崎図書、明治 35 年以降の郷土新聞
https://www.lib.pref.nagasaki.jp/library/paper_about.html
10) ドナルド・リチー著「黒澤明の映画」（社会思想社 / 現代教養文庫）商業映画に近づいた黒澤作品　訳　三木武彦
11) 笠井尚、「維新残影 : 西郷四郎と大アジア主義」日本主義 , 季刊オピニオン雑誌 (16), 57-65, 2011, 白陽社

引用文献

内田隆三 (2007)『ベースボールの夢 : アメリカ人は何をはじめたのか』, 岩波書店 .
牧野　登 (1983)『史伝西郷四郎 ― 姿三四郎の実像』, 島津書房
星 亮一（2013）伝説の天才柔道家 西郷四郎の生涯 , 平凡社新書
丸山三造 (1939)『大日本柔道史』, 講道館
ドナルド・リチー著 , 三木武彦訳 (1991)『黒澤明の映画』社会思想社 / 現代教養文庫 ,
笠井 尚「維新残影 : 西郷四郎と大アジア主義」, 季刊オピニオン雑誌 (16), 57-65, 2011, 白陽社